

ワケ カタチには理由がある(33)

～ハンドレページ・ハンプデン(Hampden)爆撃機



[筆者製作のフェイク機、ブラックシープと↑]

本機は、1936年に初飛行し、第二次世界大戦初期に使用された英国空軍の中型爆撃機です。ウェリントン、ホイットレイとともに英国空軍の双発爆撃機トリオの一角を担いました。胴体のメイン部分の幅が細く、尾翼へ続く部分は棒切れのようで、双尾翼形状とともに、とてもユニークな形状を有しています。これは乗員スペースと爆弾層を胴体前半にギュッと集めるレイアウトのためで、空気抵抗も小さくできたでしょう。一方、この胴体幅の狭さは、戦闘で負傷したパイロットを座席から助け出すことを困難にしたようで、そうなる飛行継続ができず、他の乗員は脱出するしか選択肢がなくなって、軍用機としては耐久性低下のデメリットにもなったようです。日本の石川島飛行機で設計を指導したグスタフ・ラハマンが設計を担当し、ハンドレページスラットと呼ばれる自動スラットを外翼前縁に取り付けていました。グスタフ・ラハマンとハンドレページの物語については「ネズ爺&ハテニャンの特許探偵団 vol.36～38」で取り上げていますので、興味がある方は参照ください。

【模型について】

チェコの VALOM 社 1/72 のインジェクションキットです。主翼前縁を切り離して、自動スラットを稼働状態に改造してあります。とにかくキャノピーの合いが悪いので、AZ model の別売パーツを使用しました(こんなパーツが出ているなんて、世界中で多くのモデラーが苦労したのでしょうかw)。

(中川裕幸 2021年7月)